

研究紀要

第22号

- 方形周溝墓と周溝の覆土と出土状況Ⅱ 福田 勇
－豊島馬場遺跡－
- 古代武藏国の鉄生産 赤熊浩一
－箱形炉と竪形炉－
- 古代の官衙や集落と陶硯 田中広明
- 都幾川下流低地の埋没微地形と遺跡立地（予察） 菊地 真
- 富士見市内出土石製品の鉱物分析 早坂廣人 大屋道則
- 火打石小考 大屋道則
- 石器材料及び石器の理化学的分析値（2）
大屋道則 上野真由美 新屋雅明 村端和樹 笹森健一
国武貞克 松本美佐子 田村 隆 加藤秀之

2007

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

30 talc	18 talc	31 talc	10 talc	24 talc	15 talc	34 talc
07 talc	11 talc	09 talc	26 talc	27 talc		
12 talc	13 talc	17 talc	03 talc	33 talc clinochlore		
04 talc	05 talc	06 talc	01 talc	08 talc		
16 talc	22 talc	36 talc	29 talc	28 talc		





目 次

序

方形周溝墓と周溝の覆土と出土状況Ⅱ －豊島馬場遺跡－	福田 聖 (1)
古代武藏国の鉄生産 －箱形炉と竪形炉－	赤熊浩 (21)
古代の官衙や集落と陶硯	田中広明 (39)
都幾川下流低地の埋没微地形と遺跡立地（予察）	菊地 真 (61)
富士見市内出土石製品の鉱物分析	早坂廣人 大屋道則 (71)
火打石小考	大屋道則 (81)
石器材料及び石器の理化学的分析値（2）	(91) 大屋道則 上野真由美 新屋雅明 村端和樹 笹森健一 国武貞克 松本美佐子 田村 隆 加藤秀之

方形周溝墓と周溝の覆土と出土状況Ⅱ

—豊島馬場遺跡—

福田 聖

要旨 弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、埼玉県から東京都に広がる荒川低地、東京低地には通常の堅穴建物跡ではなく、「周溝」によって構成され、方形周溝墓が付随する大規模な遺跡が多く知られている。本稿は、覆土と遺物の出土状況に、周溝、周溝墓それぞれに共通性が認められるのではないかという予想のもとに、大周溝群である豊島馬場遺跡の検討を行ない、更に鍛冶谷・新田口・舟渡・徳丸原大橋の各遺跡との対比を行った。その結果、方形周溝墓は、①覆土は自然堆積、②出土量は多量、あるいはやや多い。③土器の遺存率は高く、土器配置が見られる例もある。④出土層位は中層以上のものと下層出土のものがあるというある程度の共通性が認められた。周溝を有する建物跡については、①覆土は自然堆積、②出土量は少量、あるいはやや少量、③土器の遺存率は低く、破片が大部分、④上～中層から散在して出土する例が多い。一方で、全形の知られる土器が出土しているものや開口部の両脇に土器が集中するものも見られる。建物が検出されていない周溝については、①覆土は自然堆積、②出土量は少量、あるいはやや少量、③土器の遺存率は低く、破片が大部分、④上～中層から散在して出土するという共通点が認められた。

一方で、方形周溝墓が周溝が埋まりきるまでを単位とするのに対して、周溝では半ばまでの埋没を単位とする傾向が今回の検討でも確かめられた。こうしたサイクルは、方形周溝墓が一回性の永続性の高い周溝の掘削であり、それ以外のものは中層までの埋没で次々に更新されるべき周溝の掘削であったことを示している。従って、永続性を意識した前者は墓、後者はそれ以外の構造物の周溝、具体的には堅穴建物や掘立柱建物の周溝と考えられる。

こうした遺構の性格の違いに起因すると考えられる様相の違いは、土器配置においても認められ、群を意識したモニュメントである方形周溝墓と、一つ一つが日常的な生活空間である周溝との意識の違いがそこに表れている。

1.はじめに

筆者は、周溝を埼玉県域の古墳時代前期の低地においては一般的な遺構と考えているが、未だに遺構としての市民権を得ているとは言い難い。それは、未だに様相が整理されず、堅穴住居跡や掘立柱建物に比べて遺構のあり方が複雑で、良好なイメージが示されていないためだと思われる。周溝がこれまで長らく方形周溝墓として扱われてきた経緯も大きく影を落としている。

しかし、実際に低地を調査し、検討していく上でこの種の遺構をどのように認識していくかが重大な問題であることには変わりはない。そうした思いか

ら、これまで作業を続けてきた。「方形周溝墓と周溝の覆土・出土状況」(福田2006)で示した戸田市鍛冶谷・新田口遺跡を対象とした作業も、方形周溝墓、周溝を有する建物、それがある程度特有の埋没過程や出土状況があるのではないかという予想のもとに行ったものである。その結果については後で示すが、きれいに両者を分けるには至らないのが実状である。であるならば、更に検討数を増やし一般的な部分と個別的な部分を示していかねばならない。

本稿は、こうした作業の一環として、鍛冶谷・新田口遺跡と並ぶ大周溝遺構群である東京都北区豊島馬場遺跡（中島・小林1995、中島・嶋村・長瀬

1999)について、鍛冶谷・新田口遺跡同様の作業を行おうとするものである。

2、遺物出土状況と覆土表記の目安

本稿では、前稿同様に『豊島馬場遺跡Ⅱ』(中島・鶴村・長瀬1999)における覆土や出土状況の記述を参考にするため、前稿と重複するが、その目安を再度掲出しておきたい。

「周溝覆土については、豊島馬場遺跡では上層に地山ブロックを多く含む層については埋め戻しの可能性があるとして網掛けで表現されている。この覆土の形成については、いくつかの場合が考えられるが、改めて土層注記を通覧した結果、鍛冶谷・新田口遺跡と同様に、自然堆積(A)、下層に地山ブロックを多く含むもの(B)、全体に地山ブロックを含むもの(C)、埋め戻しの可能性のあるもの(D)、部分的に埋め戻しの可能性のあるもの(E)、不明なもの(F)があると考えられる。

遺物の平面的な分布状況については『豊島馬場遺跡Ⅱ』の「周溝全周に均一に分布する……均一((1))、局所的に分布する……集中((2))、非常に少ない……((3))」に「不明……((4))」を加えて表記した。|

層位的な分布状況は、「豊島馬場遺跡Ⅱ」では「どの層位に集中するかによって上・中・下で示」されているが、その他にも床直、確認面、不明の場合が認められるため、床直(a)、下層(b)、中層(c)、上層(d)、確認面(e)、不明(f)という六通りの表記を行った。

遺物の出土状況については、平面的、層位的分布状況とは別に、遺物の量、遺存度を確認する必要があると考えた。

遺物の出土量については、『豊島馬場遺跡Ⅱ』では点数表記が行われている。多(1)、やや多(2)、

やや少(3)、少(4)、僅少(5)、不明(6)、なし(7)に分け、表記した。

遺物は大部分が土器であるため、その遺存度についても検討した。報告書(鍛冶谷・新田口)ではそうした記述がないため、実測図の表現されている全形が復元できているか否かとともに、破片を主体とする(①)もの(破碎された状況を含む)、破片と復元実測によって全形の知れる少数のもの(②)、復元実測によって全形の知れる多数のものに加えて破片資料(③)(配置された状況を含む)に区分し、表記した。(福田2006P286I12~17、P288I1~12)

なお、出土状況(例えば集中、散在、均一)の評価は、報告書Ⅱを尊重したが、可能な限り図や写真で確認した。報告書の評価と異なるものもあることを断っておきたい。

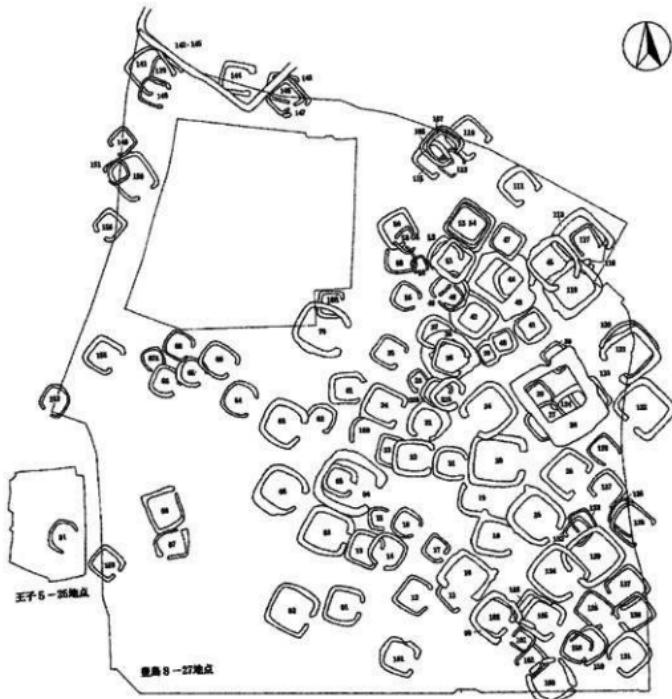
3、長瀬出氏による遺構の弁別

豊島馬場遺跡では162基の「周溝」が検出されている。これらの周溝については長瀬出氏により詳細な検討が行われており(長瀬2000・2003)、その成果についてはまた改めて検討したいが、概ね首肯できるものと思われる。

方形周溝墓とされるものは、調査区の北東に群在する周溝が全周するタイプ(D1類)のもので、28・38~43・47・49~51・53・54・119号が該当する。

「周溝をもつ掘立柱建物跡」としては、区内に建物が認められる、あるいは拡張が見られるSH09・102・25・105・129・134・135、王子五丁目25地点SH01を挙げている。

「周溝をもつ建物跡」としては、一辺の中央が開口するE1類、周溝に丸みのあるG2類、一隅が開口するC1類、二辺を欠くC3類、一辺を欠くD2類が挙げられている。先の方形周溝墓、「周溝をもつ掘



方形周溝墓の分布

豊島馬場遺跡の位置(○)



第1図 豊島馬場遺跡の位置と周溝墓・周溝の分布 (報告書、及川2005より改図・転載)
Fig. 1 Location of the Toyosima Horse Farm Site and the distribution of surrounding burial mounds and ditches (Modified and reproduced from the report, Iseki 2005).

表1 周溝の覆土と出土状況

No.	覆土	量	運び度	平面	層位
1	B	1	①	(1)	cd
2	B	4	②	(1)	cd
3	B	1	①	(1)	cd
4	E(B)	4	②	(3)	b
5	D	4	①	(3)	f
6	B	4	①	(3)	f
7	B	4	②	(2)	f
8	D	4	①	(3)	ab
9	B	4	①	(1)	cd
10	B	1	①	(1)	cd
11	B	4	①	(3)	f
12	B	2	①	(1)	cd
13	B	4	①	(1)	ab
14	E	4	②	(3)	b
15	B	5	①	(2)(3)	f
16	F	4	①	(3)	b
17	B	5	①	(3)	f
18	A	6	①	(1)	cd
19	A	4	①	(1)	b
20	A	1	②	(1)	abcd
21	B	3	①	(2)	f
22	E	4	②	(3)	f
23	B	4	①	(3)	f
24	D	1	②	(1)	f
25	D	2	①	(1)	cd
26	A	3	①	(1)	cd
27	B	4	②	(3)	f
28	B	5	①	(3)	b
29	D	5	①	(3)	b
30	B	5	①	(3)	b
31	B	4	①	(3)	f
32	D	4	②	(3)	f
33	B	5	①	(3)	f
34	F	4	②	(2)	cd
35	B	4	②	(2)	cd
36	B	1	②	(1)	cd
37	D	2	④	(1)	f
38	B	4	①	(1)	cd
39	B	5	①	(3)	f
40	B	4	①	(3)	f
41	B	4	①	(3)	f
42	B	1	②	(2)	f
43	A	1	③	(1)(2)	f
44	B	4	①	(1)	f
45	A	3	①	(1)	cd
46	B	5	①	(3)	f
47	A	4	①	(3)	f
48	B	4	①	(3)	f
49	B	4	①	(3)	f
50	B	3	②	(3)	f
51	A	3	②	(2)	b
52	B	4	①	(2)	cd
53	B	5	①	(3)	f
54	B	4	②	(3)	f
55	B	4	①	(3)	f
56	F	5	①	(3)	f

57	F	5	①	(3)	f
58	F	5	②	(3)	f
59	B	5	①	(3)	f
60	B	5	①	(3)	f
61	B	4	①	(2)	f
62	B	5	①	(3)	f
63	B	4	②	(3)	f
64	D	1	①	(2)	cd
65	B	5	①	(3)	b
66	B	4	①	(2)(3)	d
67	F	5	①	(3)	f
68	F	5	①②	(3)	f
69	B	4	①	(3)	f
70	B	1	①②	(1)	cd
101	B	4	①	(3)	cd
102	B	5	①	(2)	cd
103	B	4	①	(3)	cd
104	B	5	②	(3)	d
105	B	4	①	(1)	cd
106	B	4	①	(3)	cd
107	A	5	①	(3)	cd
108	B	4	①	(1)	f
109	F	5	①	(3)	f
110	A	2	①	(2)	b c
111	A	4	①	(4)	f
112	F	4	②	(4)	f
113	A	5	①	(4)	f
114	F	4	①	(4)	f
115	F	4	②	(4)	f
116	F	4	①	(4)	f
117	A	5	①	(4)	f
118	A	5	①	(4)	f
119	A	5	①	(4)	f
120	D	5	①	(3)	cd
121	A	5	②	(3)	b c
122	A	4	①	(3)	f
123	D	4	①	(1)	cd
124	D	4	②④	(1)	cd
125	D	4	①	(1)	cd
126	B	5	②	(1)	cd
127	E	4	①	(2)	b c
128	D	4	①	(1)	cd
129	A	2	②	(1)	cd
130	B	3	①	(2)	b c
131	A	4	②	(2)	cd
132	B	5	②	(1)	d
133	B	5	①	(3)	cd
134	D	2	②	(1)	c
135	A	2	②	(1)	c
136	F	4	①	(3)	f
137	A	4	①	(3)	d
138	A	4	②	(4)	f
139	B	2	①	(1)	cd
140	B	4	①	(2)	cd
141	A	2	②	(2)	cd
142	A	1	①	(1)	d
143	F	6	①	(4)	f

144	F	6	①	(4)	f
145	A	1	①	(1)	d
146	A	4	①	(1)	f
147	A	4	①	(1)	cd
148	A	4	①	(1)	cd
149	A	4	①	(3)	d
150	A	1	①	(1)	b c d
151	D	4	①	(3)	cd
152	B	5	①	(3)	d
153	A	5	①	(3)	f
154	B	5	①	(3)	d
155	F	4	①	(2)	d
156	A	4	①	(3)	d
157	A	4	①	(4)	b c
158	A	4	③	(1)	cd
159	B	3	①	(1)	cd
160	B	1	①	(1)	cd
161	B	4	①	(3)	f
162	E	4	①	(1)	cd

立柱建物跡」としたもの以外の大部分が該当している。後にこれらは「周溝遺構」として、内部にどのような建物が建つか、あるいはどのような性格を持つのか再検討されている。

本稿では、この長瀬氏の区分を基本に、具体的な検討に入っていくことにしたい。

4. 周溝・周溝墓の覆土と遺物出土状況住居跡

方形周溝墓（第2・3図）方形周溝墓とその可能性のあるものとしては、SH 28・38～43・47・51・53・54・119の12基をあげた。

覆土は43・47・51・119が自然堆積（A）と考えられる。28・38～42・53・54は下層に地山ブロックを多く含む（B）。28は中層に炭化物を含んでいる。

遺物は土器である。出土量は、42・43が多く（1）、51がやや少量（3）、39・119が僅少（5）で、それ以外は少量（4）である。

平面的な分布は、38で均一（（1））に出土している。43は全体に均一に出土するとともに南東溝、北東溝の東側に集中した分布が見られ（（1+2））土器配置が考えられるものである。42が西側の溝中土坑、南西溝の溝中土坑から集中して（（2））、28・39～41・47・53・54が散在して（（3））出土している。119は出土量が少なく不明である。

層位的には28と51が下層（b）、それ以外は層位が示されておらず不明（f）である。

土器の遺存率では、28・38～41・47・53・119は破片で（①）、全形の知れるものはない。42・51・54は、破片が主体で、その中に全形の知れる少數のものが含まれるもので（②）、42・51は壺を中心とし、台付壺・器台・塔が、54は台付壺を中心に出土している。43は全形の知れるものが多數出土し、前述のように土器配置が認められるものである（③）。

加えて中型の壺には底部穿孔が施されている。

また、119は方台部の際に浅い溝が掘られている。

豊島馬場遺跡の方形周溝墓は、後述する周溝を有する建物跡と比べると42・43のように出土量が多く、全形の知れる個体が多いものもあるが、周溝と同様のものもある。この特定の周溝墓に完形土器が多く見られる傾向は、古墳時代前期の方形周溝墓群に一般的に見られるものである。また、散在して出土するものが多いのも周溝と同様とも言えるだろう。下層出土と明確に認められるものも少ない。

こうした状況は、遺物量や土器の遺存率のみによっては、方形周溝墓として認定できないことを表しているとも言えよう。この点については、後述したい。

周溝を有する建物跡（第4・5図）それ以外は周溝を有する建物跡と考えられるが、豊島馬場遺跡では、SH 09・102、105、129（SB 102・103）、135で、実際に周溝で区画された内部に四本柱の掘立柱建物跡が確認されている。09と102は入れ子状になっており、09は102の拡張と考えられる。

また129は周溝底に幅20cmほどの細い溝が掘りこまれている。

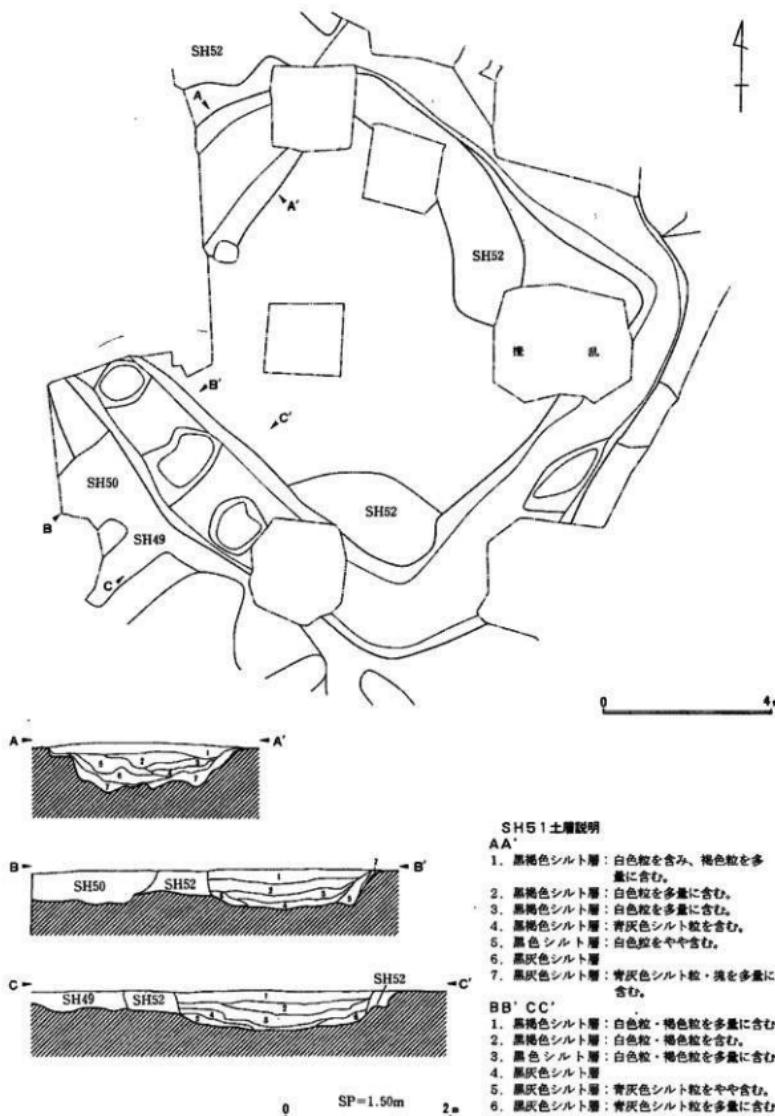
覆土は129・135が自然堆積（A）と考えられる。09・105は下層に地山ブロックを多く含む（B）。

遺物は土器である。出土量は、129・135がやや多く（2）、09・105が少量（4）である。

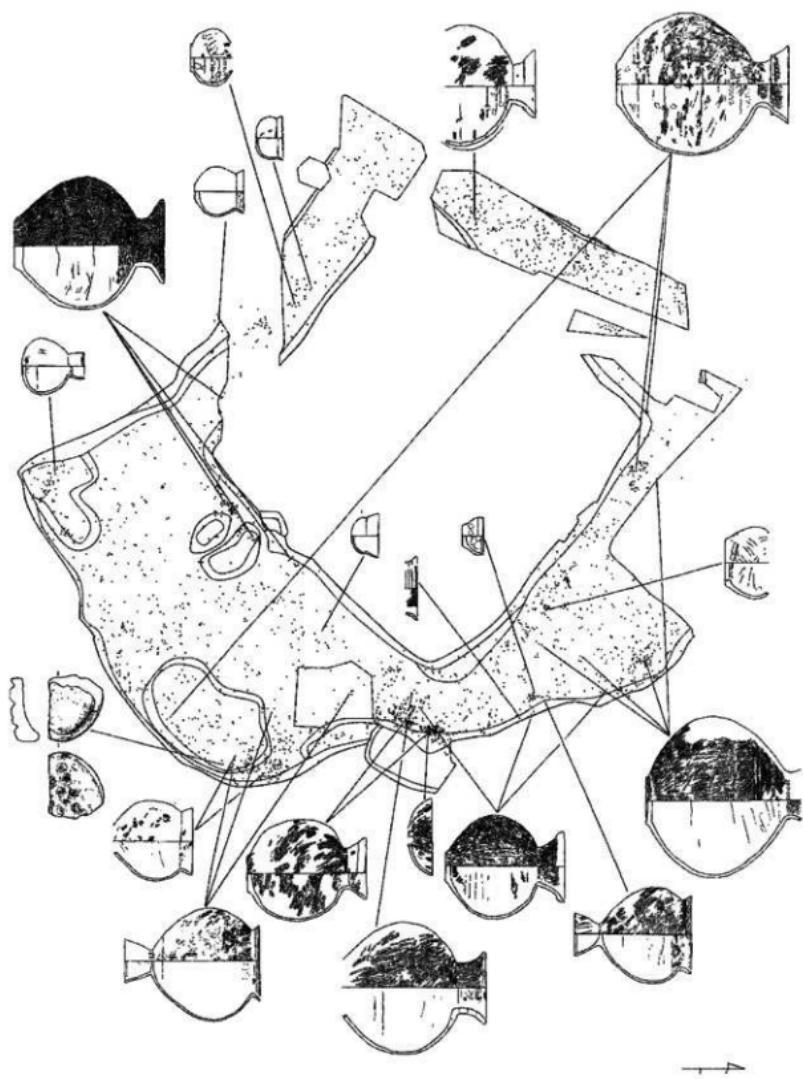
平面的な分布は、102以外は均一（（1））に出土している。09・102は、09が均一だが、102は開口部付近から集中して出土している（（2））。

層位的には135が中層（c）からで、それ以外は上層・中層から出土している（c d）。

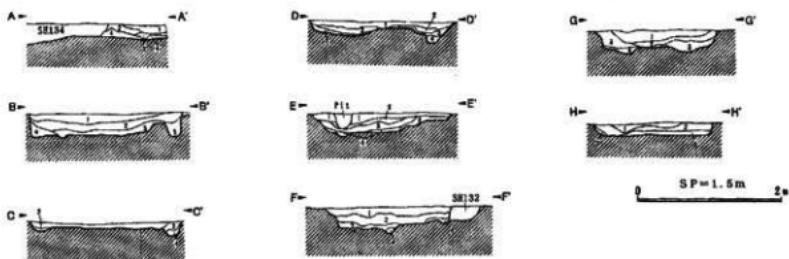
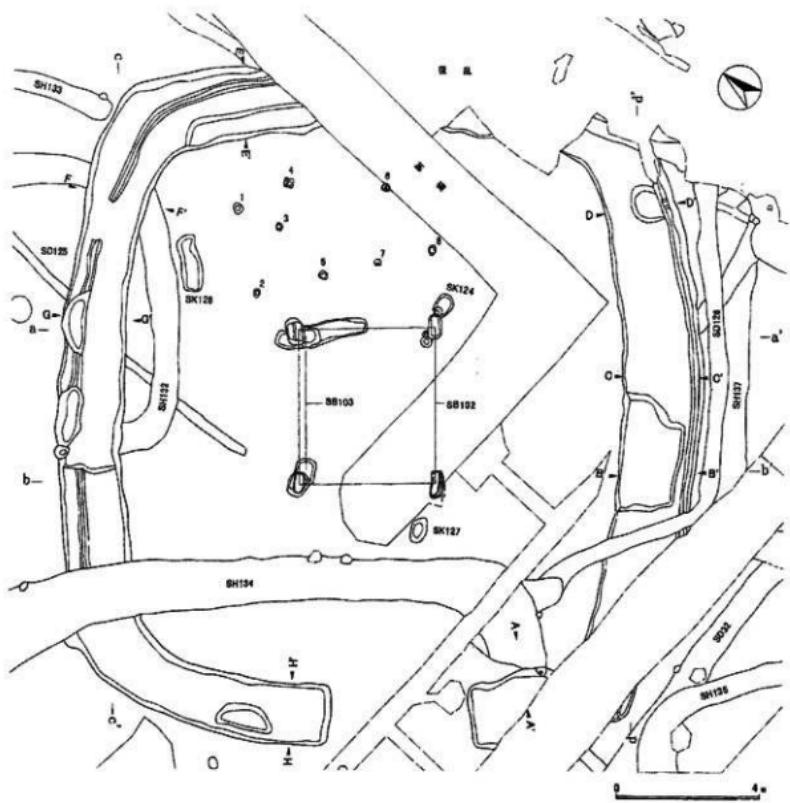
土器の遺存率では、09・102が破片（①）で、全形の知れるものはない。105・129・135は、破片が主体で、その中に全形の知れる少數のものが含まれる。



第2図 方形周溝墓（SH51）の覆土（A）（報告書より転載）



第3図 方形周溝墓（SH43）の出土状況（③）（報告書より転載）



第4図 周溝を有する建物跡（SH129）の覆土（A）（報告書より転載）

B 129 土器剖面

A A'

- 1 薄褐色シルト層 白色灰・鐵化灰を含む。
- 2 褐色シルト層 密灰色シルト層を多量含み。白色灰・鐵化灰を含む。
- 3 黑色シルト層 密灰色シルト層・白色灰を微量含む。
- 4 黑褐色シルト層 密灰色シルト層を多量含み。白色灰・鐵化灰を含む。

B B'

- 1 薄褐色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵。白色灰・鐵化灰を含む。
- 2 褐色シルト層 密灰色シルト層を多量含む。
- 3 黑色シルト層 密灰色シルト層を微量含む。
- 4 黑褐色シルト層 密灰色シルト層を多量含む。
- 5 黑色シルト層 密灰色シルト層を含む。

C C'

- 1 薄褐色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵。白色灰・鐵化灰を含む。
- 2 褐色シルト層 密灰色シルト層を少量含む。
- 3 黑色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵を微量含む。
- 4 黑褐色シルト層 密灰色シルト層を微量含む。
- 5 黑色シルト層 密灰色シルト層を含む。

D D'

- 1 薄褐色シルト層 白色灰を含む。鐵化灰を多量含む。
- 2 褐色シルト層 鐵化灰を含む。
- 3 黑色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵を含む。鐵化灰を微量含む。
- 4 黑褐色シルト層 密灰色シルト層を含む。

E E'

- 1 薄褐色シルト層 密灰色シルト層を少量含む。白色灰を含む。
- 2 褐色シルト層 密灰色シルト層を微量含む。
- 3 黑色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵を微量含む。
- 4 黑褐色シルト層 密灰色シルト層を微量含む。
- 5 黑色シルト層 密灰色シルト層を含む。

F F'

- 1 薄褐色シルト層 密灰色シルト層を少量含む。白色灰を含む。
- 2 褐色シルト層 密灰色シルト層を微量含む。
- 3 深褐色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵を微量含む。
- 4 黑褐色シルト層 密灰色シルト層を微量含む。

H H'

- 1 褐色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵。白色灰を含む。
- 2 黑色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵を含む。
- 3 黑褐色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵を微量含む。
- 4 黑色シルト層 密灰色シルト層・鐵・鐵を微量含む。

るもの（②）である。105は高坏1点、129は器台4点、135は鉢3点が全形を復元実測したものである。（③）。

例が少ないため参考程度にしかならないかもしれないが、量的にはやや多く、均一に、上・中層から、破片が中心だが全形の知れるものが少数出土するという傾向が認められる。

周溝（第6～9図）前述の16基以外のものは、基本的に建物跡の外周溝と考えられるが、ここでは一括して取り扱う。

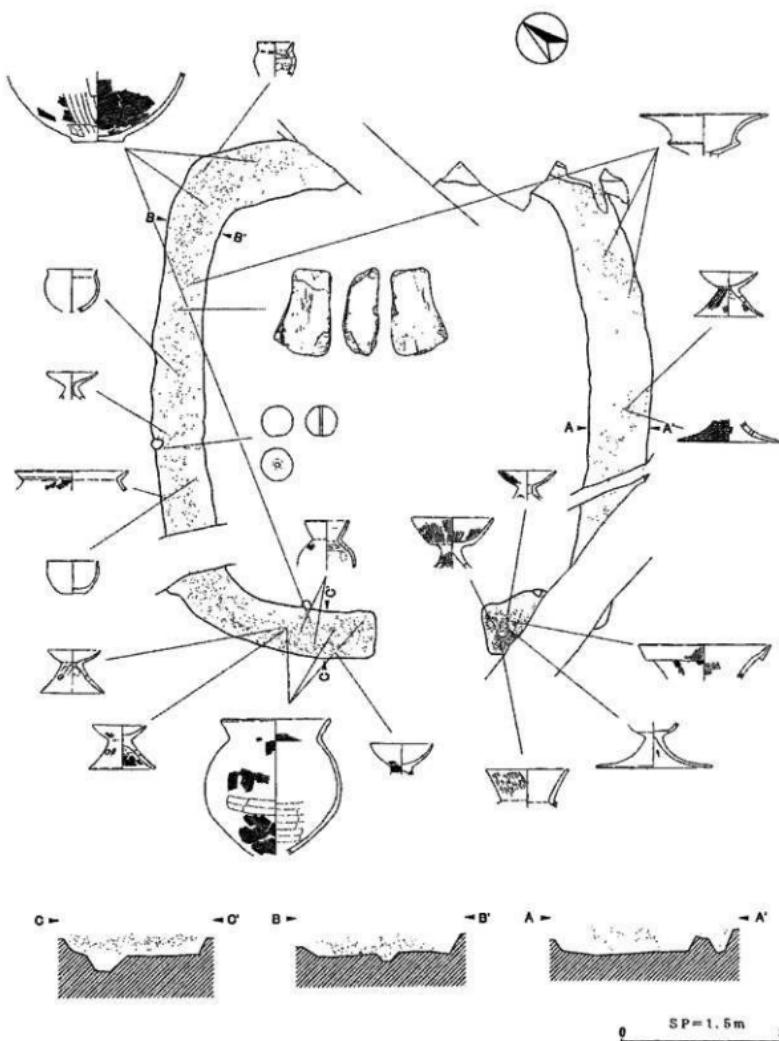
覆土は、自然堆積のもの（A）が18～20・26・45・107・110・111・113・117・118・121・122・131・137・138・141・142・145～147・150・153・156～158の28例、下層に地山ブロックを多く含むもの（B）が1・2～4・6・7・10～

12・13・15・17・21・23・27・30・31・33・35・36・44・46・48～50・52・54・55・59～63・65・66・69・70・101・105・106・126・130・132・133・139・140・152・154 A・159・160・161の53例、埋め戻しの可能性のあるもの（D）が5・8・24・29・37・64・120・123・124・125・128・134・151の13例、部分的に埋め戻しの可能性のあるもの（E）が14・22・31・67・127・162の6例、不明なもの（F）が16・25・34・56～58・68・112・114～116・136・143・144・155の15例である。

自然堆積と考えられるもの（A）、下層にプロックを多く含むもの（B）で、83例と全体の7割を占めている。その内、106は開口部付近の下層に地山ブロックを含む。150は南東溝下層に地山ブロックを多く含み、埋め戻しの可能性もある。160は土層全体にばらつきが大きい。下層に地山ブロックを多く含み、埋め戻しの可能性があるものは全体の15%ほどである。大半のものはほかの造作も受けないで、埋没したものと考えられる。

埋め戻しと考えられるもので、24・64、128、134は上層に明瞭な埋め戻し土が認められる（D）。一部に埋め戻しが認められるものは、全体としては自然堆積と考えられるもので、14は南東溝と開口部周辺、22は開口部と溝中土坑の部分のみ、31・32は開口部周辺のみ、67はBのみ、127は開口部のみ、162は南東溝のみで埋め戻し土が認められる。逆に言えば、その部分が他の部分に比して長く開口していたことにより、埋め戻しが行なわれたともいえるのかもしれない。

不明としたものは図示されていないものや、部分的なものである。図示されていないものは16・25・34・68・136で、それ以外はごく一部が検出されているものである。



第5図 周溝を有する建物跡 (SH129) の出土状況 (①・cd) (報告書より転載)

また、覆土に炭化物・焼土を含むものが認められる。20は南溝底、西溝底から炭化材が、127の南北側開口部の中～下層には焼土が混入している。

出土遺物は、03・64からガラス小玉の鉢型が、20から管玉・勾玉が、24から管玉が、36から土玉が、124から木製品が出土している。こうした例はごく一部で、大部分は土器のみである。

出土量は、多量のもの（1）が01・03・10・20・24・36・64・70・142・145・150・160の12基である。やや多いもの（2）が12・25・37・110・134・139・141の7基である。やや少量のもの（3）は21・26・45・130・159の5例である。少量のもの（4）は2・4～8・11・13・14・16・19・22・23・27・31・32・34・35・44・48～50・52・55・61・63・66・69・101・103・106・111・112・114～116・122～125・127・128・131・136～138・140・146～149・151・155・156～158・161・162の58基である。僅少のもの（5）は15・17・28～30・33・46・56～60・62・65・67・68・102・104・107・113・117・118・120・121・126・132・133・152～154の30例である。不明のもの（6）は18・143・144の3基である。

出土量は最も多いのが少量のもので、全体の50%を占めている。次いで多いのが僅少のもので26%である。両者で8割に近く、概して遺物が多いとは言い難い。多量のものは9.6%、やや多量のものは6%、やや少量のものは4%、不明は2.6%である。不明のものは遺構が部分的にしか調査されていないものである。出土量が多量のものから、前述の玉類や鉢型といった特殊な遺物の出土傾向が認められる。

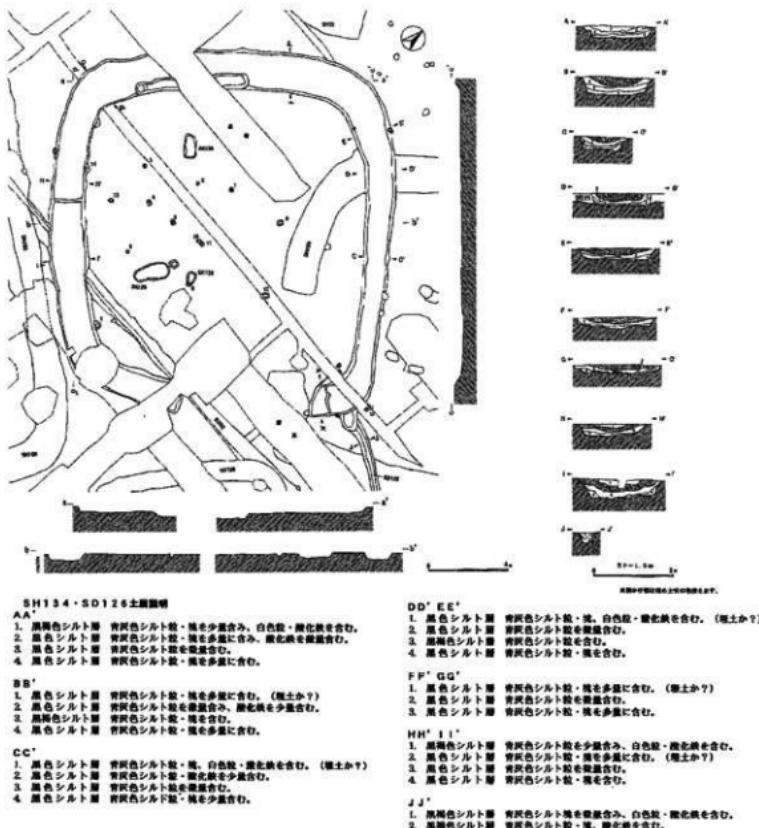
平面的な出土位置は、均一（（1））に出土しているものが、01～03・10・12・13・18～20・24・25・36・37・44・45・70・123～126・128・

132・134・139・142・146～148・150・158～160・162の33基である。10は南西コーナーにやや集中している。20は全体に均一に出土しているが量が多く、特に西溝上層に破碎されたような細かな台付壺を中心とした破片が濃密に分布している。また、南西コーナーに接続するSD42周辺にも集中する傾向があり、分布としてはSD42に連続している。70は分布図が図示されていないため具体的には不明だが、南西溝中央の確認面に集中して出土する傾向があるようである。134は開口部付近に小型の器種を中心にやや集中して出土している。159は北西コーナー付近に台付壺を中心に集中して分布する傾向がある。160は均一だが遺物量が多く、北東溝にやや集中して分布する。

コーナーや開口部などの周溝の特定の箇所に集中して出土しているもの（（2））は、07・21・26・34・35・52・61・64・110・127・131・140・141・155の15基である。7は西側開口部際に壺を中心に破碎された状態で集中して、21は北溝に集中して（報：報告書の記述、以下同じ）、34は北東コーナーから開口部にかけて（報）、52は北側開口部、北コーナー付近に集中して（報）、61は北溝の北西コーナー付近にやや集中して（報）、64は北溝中央と東溝のSD70周辺に集中して出土している。前者は破片で、後者は全形の知れるものである。110はコーナーに（報）、127は開口部付近に（報）、130は開口部の両側に（報）、131は北西コーナーと北溝中央に、140が北西溝に（報）、141が北西溝に集中して出土している。155は集中する可能性が示唆されている（報）。

15・16は全体としては散在の状態で出土しているが、溝中土坑に遺物が集中するもの（（2）+（3））とした。

周溝全体から散在して出土するもの（（3））は、



第6図 北溝 (SH134) の覆土 (D) (報告書より転載)

04・06・08・11・14・16・17・22・23・27・
29・30・31~33・46・48~50・55~60・62・
63・65・67~69・101・103・104・106・107・
120~122・133・136・137・149・151~154・
156・161の50基である。記載や図示がなく不明なもの((4))は、111~118・138・143・144・157の12基である。

27は全体としては散在しているが、北溝の溝中土

坑中から板材と器台、台付壺が出土している。

121は北溝中央で壺が破碎された状態で出土している。

このように散在して出土しているものが最も多く、全体の45%を占めている。一部に集中するものが13%で、出土量が少ないこともあるのだろうが、六割が散在して出土していることになる。

出土層位は、溝底に接して出土しているもの(a)

が20の1例である。20は西溝北側の底面から小型高坏と勾玉が出土している。炭化材が床面から出土している。20のその他のものは上層からの出土である。また、27・37・48・124でも木製品が出土しているが、いずれも底面からの出土である。溝底から下層にかけて出土しているもの（a b）は08・13の2例である。08は器形が知れるものは底面から出土し、その他のものも下層から出土している。

下層から出土しているもの（b）が04・14・16・19・29・30・65の7例、下層から中層にかけて出土しているもの（b c）が110・121・127・130・157の5例、下層から上層にかけて出土しているもの（b c d）が150の1例である。中層から出土しているもの（c）は、134の1例である。埋め戻し土中からの出土と考えられる。中・上層から出土しているもの（c d）は01・02・03・10・12・18・25・26・34～36・45・52・64・70・101～103・106・107・120・123～126・128・131・133・139～141・147・148・151・158・159・162の37例である。10・101は下層の地山ブロックを多く含む土の上から出土していると考えられる。124の木製品が集中して出土した土坑状部分は周溝が埋没した後に掘り込まれている。

上層から出土しているもの（d）は66・104・132・137・142・145・149・152・154～156の11例である。66は上層から破砕された状態で出土している。また、報告書の文中、図中に記載がなく不明なものが、05・06・07・11・17・21～24・27・31～33・37・44・46・48・50・55～63・67～69・111～118・122・136・138・143・144・146・153・161の46例である。

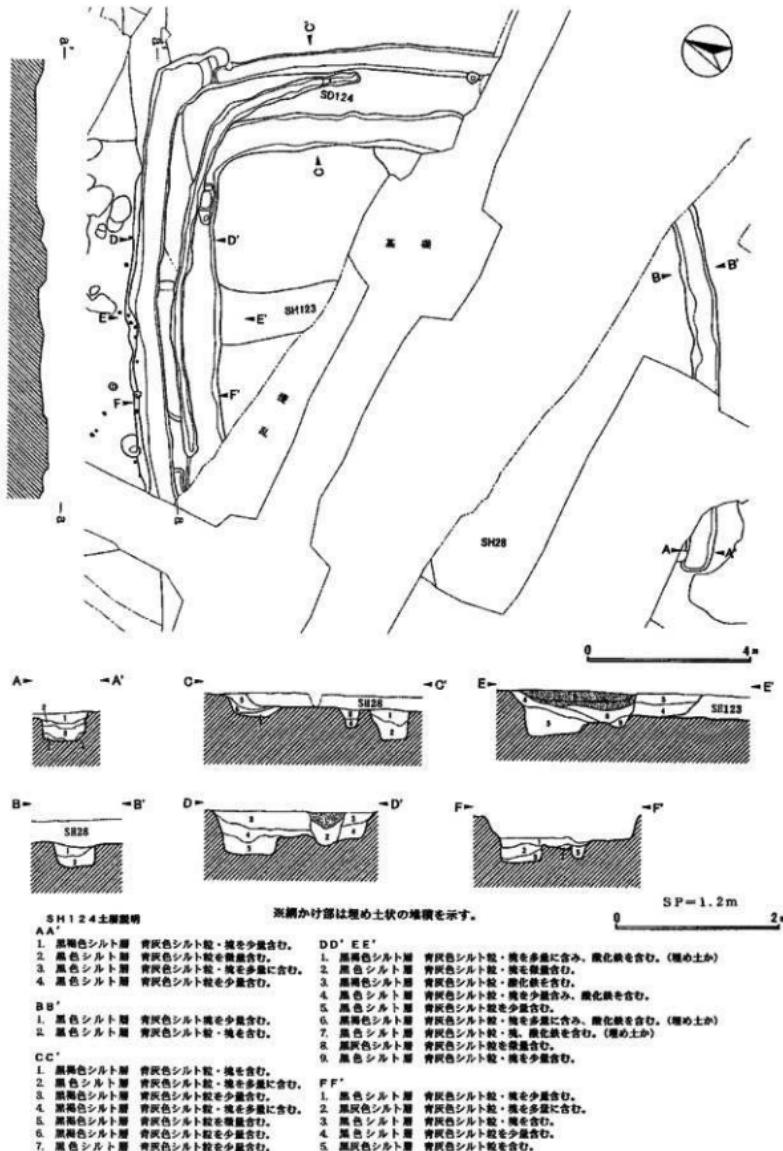
不明のものが4割を占めるが、上・中層で全体の45%に上る。中層以下のものは13%程度しかなく、大半が中層以上から出土していると考えていいだろ

う。

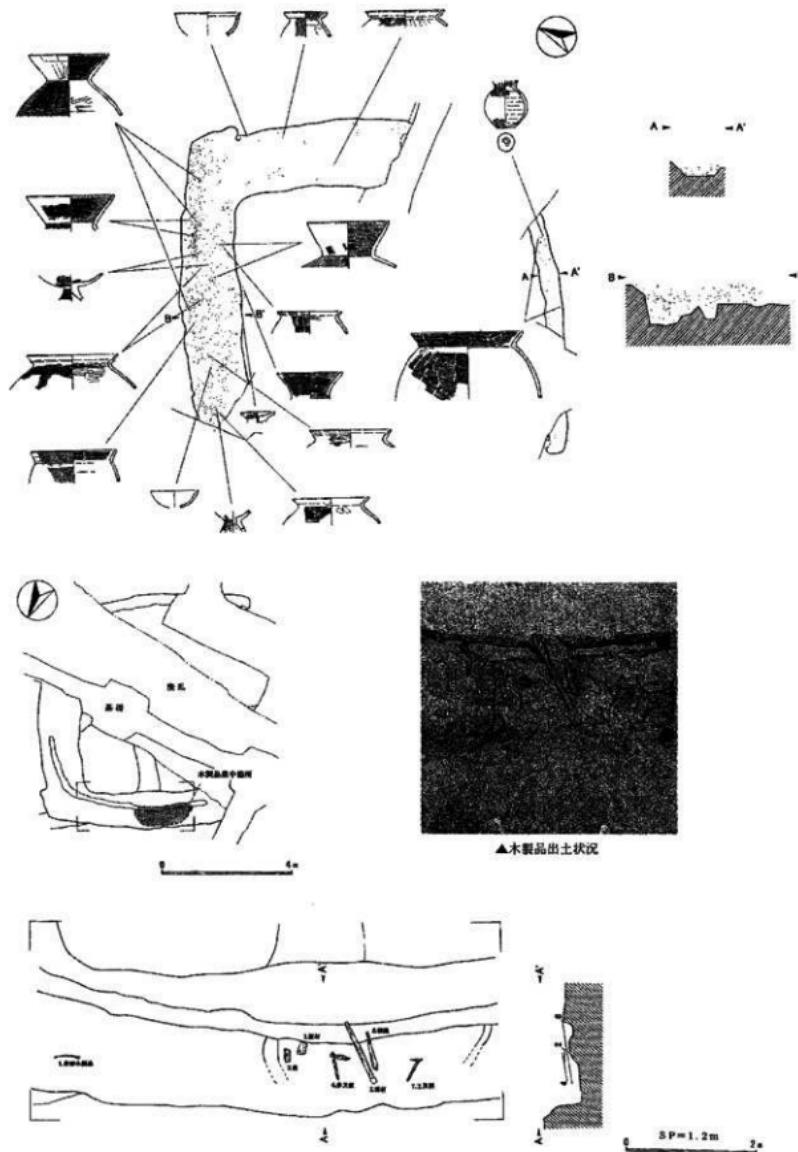
土器の遺存率は、破片が主体の例（①）は、01・03・05・06・08・10～13・15～19・21・23・25・26・29～31・33・37・44～46・48・49・52・55～57・59・60～62・65～69・101・103・104・106～111・113・114・116～118・120・122・123・125・127・128・130・133・136・137・139・140・142～149・157・159・161・162の86例である。

破片がほとんどで実測によって全形が知れるものが少數出土する例（②）は、02・04・07・14・20・22・24・27・32・34～36・50・58・63・64・70・112・115・121・124・126・131・132・134・138・141の27例である。02は小型壺が南東溝の溝中土坑から、04は開口部北側から壺2点が、07は北西コーナーの突出部から広口壺が、20は前述のように西溝北側の底面から小型高坏と勾玉が出土している。出土位置は不明だが、14・22・34は全形の知れる広口壺が、32・36は全形の知れる高坏が、35は全形の知れるミニチュアに近い壺、50は全形の知れる壺・台付壺が、58は完形の壺が、63は全形の知れる高坏と鉢が、70は全形の知れる壺と鉢が、112は完形の器台と壺が、115は手握3点が、126は完形の器台が、132は全形の知れる器台が出土している。27は北溝溝中土坑中から完形の器台と鉢が、64は前述のように北溝中央と東溝のSD70周辺に集中して出土している。特に後者では、全形の知れる台付壺・鉢が並べられたような状態で出土し注目される。121は南東開口部際から完形の高坏が、131は南西溝の中央から全形の知れる壺・壺が、134は開口部の両脇から小型壺・鉢等が出土している。

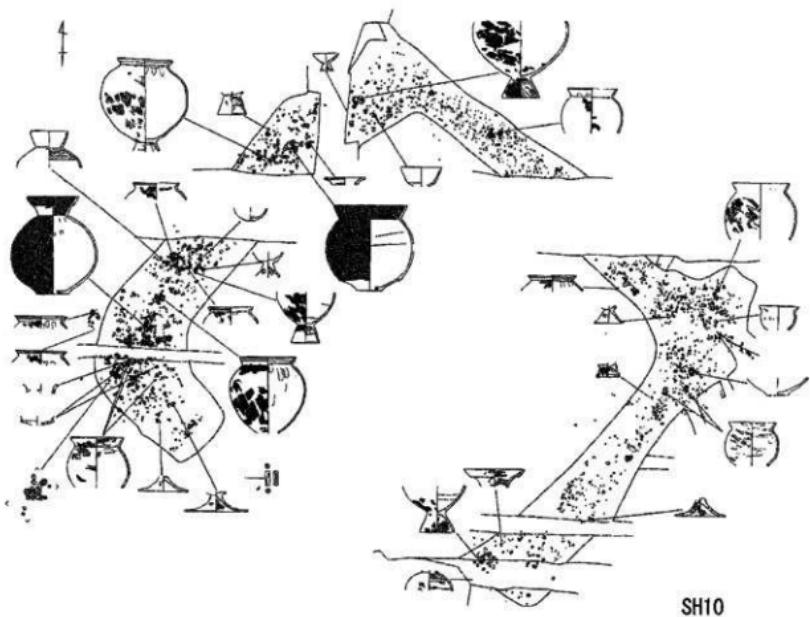
復元実測によって全形が知れるものが多数出土し、加えて破片が出土するか、配置された土器が出土す



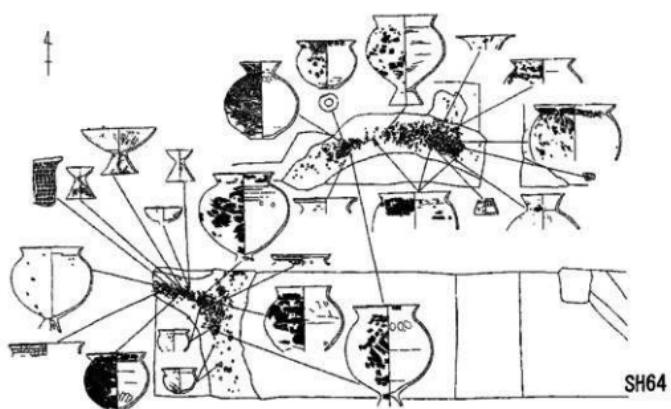
第7図 周溝 (SH124) の覆土 (D) (報告書より転載)



第8図 周溝（SH124）の出土状況（②④）（報告書より転載）



SH10



SH64

第9図 周溝 (SH10・64) の出土状況 (①②) (報告書より転載)

る例（③）は158の1例のみである。西溝中央に壺が並べられた状態で出土している。

木製品は20で炭化材、27で板材が、37で加工材が、48で藤柄叉鉤が、124で多叉鉤、杏、横槌、舟形木製品、工具の柄、部材等の木製品が多く出土している（④）。

こうしてみると破片の状態のものが実に全体の八割を占め、少数の全形の知れる個体が出土しているものは二割程度しかない。調査時の印象だが、その破片もおよそ3~5cmセンチ前後のいうなれば粉々の細片であった。こうした印象は鍛冶谷・新田口遺跡と同様である。これは故意に破碎して廃棄した結果なのであろうか。

一方全形の知れるものが一定程度あることにも注意しておきたい。特に64や158の例（第9図）は完全に近い土器が一括して並べられたような状態で「配置」された結果と考えられる。

以上のように、周溝の覆土は自然堆積のものが大部分で、土器を主体とする遺物は出土量が少なく、破片が主体であり、散在して中層以上から出土するものが多いことが分かる。

こうした状況は、鍛冶谷・新田口遺跡や「旧入間川水系下流域の周溝墓と周溝」（福田2006）でみた、東京都板橋区徳丸原大橋遺跡、舟渡遺跡と概ね共通すると考えられる。次にやや詳しく、これらの遺跡の様相と比較してみることにしよう。

5. 覆土、出土状況の共通点と相違点

鍛冶谷・新田口遺跡、舟渡遺跡、徳丸原大橋遺跡の方形周溝墓、周溝を有する建物跡、周溝の覆土、土器量、遺存率、平面的分布状況、層位について概略を表2で示した。

この表に盛り込めなかった部分を含めて、4遺跡の様相について共通点と相違点を整理しておきたい。

まず、方形周溝墓については、覆土は自然堆積である。出土量は多量、あるいはやや多量である。土器の遺存率は高く、土器配置が見られる例もある。出土層位は中層以上のものと下層出土のものがある。一方で、前述のように出土量が少ないものもあり、破片も決して少なくない。出土状況も、散在する程度のものしか認められないものもある。

このような状況は、単純に一つの様相のみを取り上げて遺構の種類を判断する困難を感じさせる。本稿で取り上げた以外の平面形や群構成といった点からの評価も併せて必要なことをよく示しているといえよう。

こうした遺構の性格については、総合的な判断が求められている。

周溝を有する建物跡については、覆土は自然堆積、出土量は少量、あるいはやや少量である。土器の遺存率は低く、破片が大部分である。上～中層から散在して出土する例が多い。一方で、全形の知られる土器が出土しているものや、開口部の両脇に土器が集中するものも見られる。

表2 4遺跡の覆土と土器の出土状況

	鍛冶谷・新田口			舟渡・徳丸原大橋		豊島馬場		
	周溝墓	建物	周溝	建物	周溝	周溝墓	建物	周溝
覆土	A	A	AB	B	AB	BA	AB	AD
土器量	やや多	少	少	やや少	まちまち	多	やや多	少
遺存率	全形	破片	破片	破片、全形	破片	完形	破片	破片
平面分布	均一	散在	散在	散在	散在	土器配置	均一	散在
出土層位	中層以上	上・中	上・中			下層	上・中	上・中

建物が検出されていない周溝については、覆土は自然堆積、出土量は少量、あるいはやや少量である。土器の遺存率は低く、破片が大部分である。上～中層から散在して出土する例が多い。

一方で、豊島馬場では明瞭に埋め戻されているものが認められる。また、鍛冶谷・新田口、豊島馬場とも、器種は様々だが、完形のものを含む20数個の全形の知られる土器が出土している。少数ながら鍛冶谷・新田LJ12・44号、豊島馬場SH64・158のように土器配置が見られる例もある。単純に括れない部分も大きく認められるのである。

舟渡遺跡の周溝には焼土や炭化物が多く見られ、豊島馬場遺跡からは木器や部材、ガラス小玉の鉄型といった特殊な遺物が出土しており、遺跡を越えて様相を単純化することの危うさを感じさせる。

このように、4遺跡における大まかな共通性を確認できたが、単純に割り切れない部分も多く、前述のようにその評価には総合的な判断が必要と考えられる。

一方で、大まかな共通性から、方形周溝墓とそれ以外の周溝の覆土の形成や、出土状況から、遺構の性格の違いについて推察できる部分もある。

その一つとして、前稿でもあげた遺構の機能のサイクルとでも言うべき、方形周溝墓が周溝の埋没全体を単位とする（埋まりきるまでを一つのサイクル）のに対して、周溝では半ばまでの埋没を単位とする（中層まで埋没した時点が一つのサイクル）とする傾向が今回の検討でも確かめられた。こうしたサイクルは、方形周溝墓が一回性的永続性の高い周溝の掘削であり、それ以外のものは中層までの埋没で次々に更新されるべき周溝の掘削であったことを示していると言つてもいいだろう。従って、永続性を意識した前者は墓、後者はそれ以外の構造物の周溝、具体的には竪穴建物や掘立柱建物の周溝と考え

るのが、やはり妥当だということを示していると考えられるのだが、いかがであろうか。

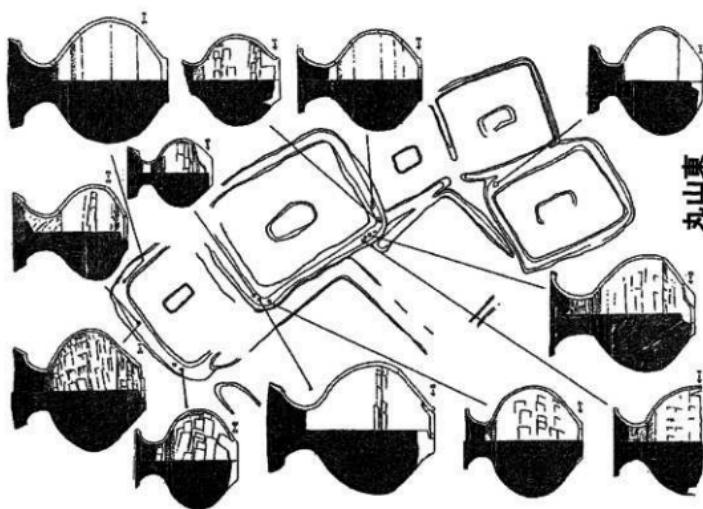
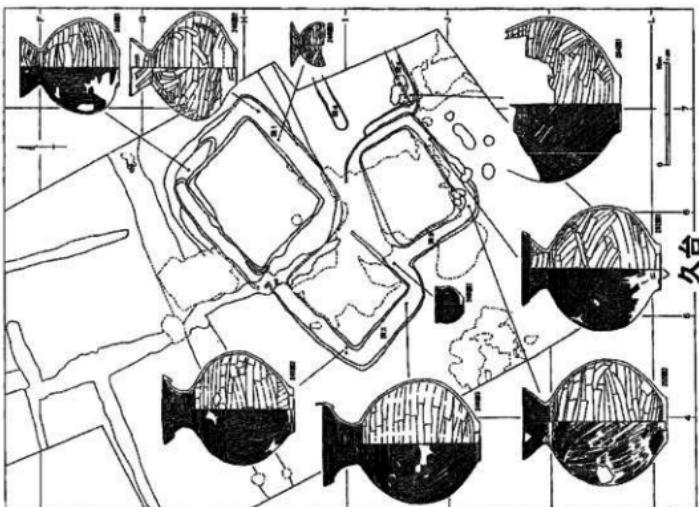
こうした遺構の性格の違いに起因すると考えられる様相の違いは、土器配置においても認められる。方形周溝墓が群全体を意識した土器配置を行っていることについては別稿（福田2007）で述べたところである。方形周溝墓における土器配置は、墓への入り口のみではなく、墓から離れた場所から見られることを意識して行われている（第10図）。それに対して周溝の土器配置は、開口部際に代表されるように、入り口から見える範囲を意識しているような位置が多い。即ち、その配置は、その周溝のみを意識して行われている可能性が高いと考えられ、周溝一つ一つが単位なのである。群を意識したモニュメントである方形周溝墓と、日常的な生活空間である周溝との意識の違いがそこに表れていると考えられる。

6. 小結

以上のように、前稿や「旧入間川水系」での検討と合わせて、方形周溝墓、周溝の覆土と出土状況の様相から、両者に対する意識の違いがその様相に反映されているのではないかと推察した。

しかし、繰り返し述べているように、各遺跡における様相は複雑で、単純な括りについては慎重であるべきだろう。そのためにも東京低地、荒川低地全体の中での相対的な位置づけが必要と考えられる。

本稿は前稿の続編ではあるが、当初「旧入間川水系」の（下）を企画したもの一部であった。本稿なら（上）で行った作業の後半に当たるものである。諸般の事情で前半の掲載が困難になってしまった、本稿の内容のみを別に一編とした次第である。前述の相対的な位置づけのためにも、残された部分についてなるべく早く形にしたいと考えている。ともあれ、前稿でも述べたように、現在残されている



第10図 方形周溝墓の土器配置（福田 2007b より転載）

状況の形成過程は、造られた目的、機能を敷衍しつつもまた違った当時の人々の意識を垣間見せるものであることを今回も感じることができた。

一つの要素に偏らない、総合的な遺構の評価の必要性も、今回の検討の中でまた改めて感じられた。

何度も感じている人間の造る構造物の複雑性を改めて確認したともいえるだろう。

前稿の繰り返しになるが、こうした作業は、同様の方形周溝墓、周溝が検出されている全ての遺跡について、あるいは他の遺構についても行われるべきものである。こうした土層注記や分布図が、その遺構の履歴、歴史を示すことを考えれば、土層注記一つとっても発掘調査でおろそかにできないのを再認識した次第である。

遺跡に対していかに真摯でいられるかが改めて問われているのである。

後考を期し、とりあえず稿を閉じることにした
い。

(2007年6月7日記)

謝辞

本稿の内容については、発掘調査から何度もお邪魔させて頂いた豊島馬場遺跡の担当者である中島広顕、嶋村一志、小林高、黒田恵之、長瀬出の各氏から受けた様々なご厚意によるところが大きい。周溝については飯島義雄、及川良彦、栗岡潤の各氏に、方形周溝墓との関係においては伊藤敏行、立花実の両氏と方形周溝墓研究会の方々に有益なご教示を頂いた。新屋雅明、岡田雄介両氏からもご教示を頂いた。図版の作成に当たっては新井さとみ氏に協力頂いた。以上の方々に末筆ながら感謝申し上げたい。

参考・引用文献

- 及川良彦 2004 「関東地方の低地遺跡の再評価（5）－墓と住居の誤認－」『「方形周溝墓研究の今」II』 pp89～129 方形周溝墓シンポジウム実行委員会
- 2005 「墓と住居の誤認」『方形周溝墓研究の今』 pp111～148 雄山閣出版
- 立花 実 2000 「方形周溝墓の常識」『西相模考古第9号』 P76～89 西相模考古学研究会
- 中島広顕・小林高・小林理恵 1995 「豊島馬場遺跡」 北区埋蔵文化財調査報告16集 北区教育委員会
- 長瀬 出 2000 「東京都豊島馬場遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『法政考古学第26集』 P1～26 法政考古学会
- 長瀬 出 2003 「南関東地方における「周溝をもつ建物」の検討－東京都北区豊島馬場遺跡の再検討を中心に』『法政考古学第30集』 P205～221 法政考古学会
- 中島広顕・嶋村一志・長瀬出 2000 「豊島馬場遺跡II」 北区埋蔵文化財調査報告25集 北区教育委員会
- 西口正純 1986 「鐵冶谷・新田口遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 勝 2000 「方形周溝墓の再発見」 同成社
- 2006 「方形周溝墓・周溝の覆土と出土状況－鐵冶谷・新田口遺跡－」『埼玉の考古学II』 pp285～304 埼玉考古学会
- 2006 「旧入間川水系下流域の周溝墓と周溝（上）」『研究紀要第21号』 pp51～84 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 2007 「方形周溝墓における土器使用と群構成」『原始・古代日本の祭祀』 pp30～69 同成社
- 山岸良二（編） 1996 「関東の方形周溝墓」 同成社
- 2005 「方形周溝墓研究の今」 雄山閣出版

研究紀要 第22号

2007

平成19年6月21日 印刷

平成19年6月28日 発行

発行 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4-4-1

<http://www.saimai bun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社バスコ